
REVENGE of GREED～復讐のグリード～ AVENGER ANKH

ダークカブト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

REVENGE of GREED（復讐のグリード） AVE
NGER ANKH

【Nコード】

N5702W

【作者名】

ダークカブト

【あらすじ】

その日、一匹の怪物が死んだ彼女は信じていた者を殺され信頼していた仲間に裏切られ怪物は怨念を残し消えると思った……………だが、

終わりと始まりと異世界（前書き）

これはある小説を見て無性に書きたくなったので書きましたさすがに今月二つ目の新連載はきついと思いましたがFAIRY SOULが連載終了しましたので、最近ハマっているNEEDLESと仮面ライダーオーズとリリカルなのは、その他のクロスオーバー小説です。

終わりと始まりと異世界

とある世界

パン！

??? 「ぐはっ！」

銀色の長い髪をした女性が燃えさかる森の中で倒れこむ。

そして女性の隣には銃を持った少年が女性を見下すような目で見つめていた

??? 「何の……真似だ?……」

女性は少年を睨みつける

??? 「お前は……私に……この森にいる……奴等を救助する為に……呼んだんだろ?……」

??? 「悪いけど、それは全部?だ……この場所に君を連れてくる為に一芝居打ったんだよ」

??? 「何……だと?……」

女性は少年の言葉に驚く

??? 「けど映司君の行動は焦ったよ、僕の目的に気づいて邪魔しに来たんだから」

??? 「映司!?!……貴様!ごはっ!……映司に何をした!」

女性は唯一人の友の身を案じた……だが

??? 「彼は邪魔だったからもう」

??? 「死んでもらったよ」

??? 「……………貴様あああああああ！！！」

女性は右腕を変化させると少年に向かって火炎弾を打ち出した

だが少年はその攻撃を右に受け流した

??? 「なっ!？」

??? 「君の攻撃は全てお見通しだよ…せめての情けとして苦し
まずに殺してあげるよ……………さようならアंक」

アंक 「ふざけるな!!」

少年にアंकと呼ばれた女性は背中から紅い翼を出現させるとその
場から逃げ出した

??? 「しぶとい……………さすがはグリードと言った所か、早く彼女の
メダルと他のメダルを回収しなくちゃ」

少年は空を見上げ燃え盛る森の中にたたずんだ

上空ではアंकが打たれた右腹を押さえながら飛行していた

アंक「くそっ！くそっ！……なんでこんな事に…管理局の奴等、最初から私を殺すつもりだったのか！………映司！」

アंकは信頼していた男の死に涙を流す

彼女の名はアंक 欲望のメダル コアメダルから作られた怪人
グリードの一人である、彼女は他のグリードを裏切り一人の青年
火野映司と共にグリードを倒した最初彼女は映司を唯のメダル集め
の道具、そして人間を欲望の塊とだけ見ていたが映司と関わってい
き変わっていったのだが……

アंक「……結局、私は世界に必要とされなかったとゆう分けか
……」

アंकの目の前には武装した局員達がアंकを待ち構えていた

??? 「アंक、君の負けだコアメダルを渡せ」

アंक「ふふ…ふふふふ」

??? 「?..?」

[illegible]

「???」
「頭でもおかしくなったか？」

アंक 「フッフ……まさかこんな最後を遂げるとは、あっけないな」

「???」
「何を言っている……」

アंक 「分かった、お前らの望みどおり死んでやるよ……但し!!」

「???」
「??」

アंक 「貴様等にコアメダルを渡す気はない！」

「???」
「……!!、まさか!!」

アंक 「そのまさかさ！」

少年の驚愕した顔を見てアंकは笑みを浮かべる

??? 「よせえええええ!!!!」

するとアンの体が光りだした

アン（映司：お前と過ごした日々は私にとって満足できる時間だった今まで生きてきた中で最高のな……だが、管理局の奴等だけは許さん！）

アン 「覚えておけ管理局のクズ共!! 私はいつか必ず貴様等に復讐する! その時が来るまで残りの命を楽しめ: はははははははははははははははは!!」

そして光がアンを包み込むと辺りから爆発が起きた

アンは笑みを浮かべながらも消えていったその怨念を残して

??? 「……………くそっ!、アンクめ! コアメダルごと爆発しやがった!」

少年は唇を噛み締めながら悔しがる

??? 「シイイン!!」

すると少年の下に白いバリアジャケットを着た少女が向かってきた

シン「なのは！」

なのは「シン！無事でよかった！……それと彼女は……」

少女は嬉しそうな顔もするもアングの事を言った瞬間、顔が曇った

シン「奴は死んだ、コアメダルと一緒に」

なのは「そう……」

2人はすぐにその場を後にし六課へと戻った

アंक「……………んっ？……此処は、地獄か？地獄にしては殺風景な場所だな」

アंकが目を覚ますとそこには廃墟と化した街が広がっていた

終わりと始まりと異世界（後書き）

気づいたらかなり書いていた、まあ、なのは達が出るのはむっちゃ遅くなるとは思いますがね、次の話からはアंकとブレイドやクルス達の出会いから始まります。

右腕と出会いとブラックスポット（前書き）

今回はあの残念少女が出てきます。

右腕と出会いとブラックスポット

「一応、空からこちら辺一体を見て回るか」

アंकは本来のグリードの姿に成ろうとしたが

「……………何で右腕しか復活していないんだ」

アंकは今の状況を把握しようと頭をフル回転していた

（確か私はあの時自爆と見せかけて100枚程セルメダルを爆発させたはず……………それはいいとして此処はどこだ？ミッドチルダでない事は確かだ…だとしたら別の管理世界か管理外世界か…恐らくはセルメダルを爆発させた事によって小さな次元震が出現した…その中に私は引きずり込まれてこの世界に来た、多分そんな所だろうそれに右腕は爆発のショックで一時本来の姿に戻れず右腕しか戻らないのかもしれない）

すると後ろから何かが近づいてくる音がした

「何だ？」

アंकが後ろを振り返ると四速歩行の白いロボットがこちらに近づいてきていた

「何だあのロボットは？見たところガジェットではなさそうだな…
…まあ、唯一分かってる事は…」

ロボットのモノアイが赤く光るとアंकに向かってマシンガンを撃ちだした

「私の味方ではないとゆうことだ」

アंकはロボットの攻撃を避けるとロボットに向かい火炎弾を放ちその隙にアंकは近くの建物の中に隠れる

（さて、どうする幾ら攻撃はできるとはいえまだ全体の十分の一しか出ていないこの状態でどれだけ戦えるか…いや、此処はやはり相手がどこかに行くまで隠れた方がいいかも知れん）

アंकがそう考えていると

外にいるロボットがアंकの横の壁にマシンガンを乱射し壁を破壊した

（ばれた！？…ええい！一か八かだ！！）

アंकは窓を突き破りロボットに向けて火炎弾を放った

（どうだ？）

アंकは下に着地するとロボットの方を見る

「くそっ！…無傷か」

ロボットはアंकの火炎弾により若干装甲が焦げていたがダメージは皆無で合った

ロボットはアंकにマシンガンを向ける

（此処までか！）

アंकが諦め掛けた時

「ちょっと！待った！！」

アंकとロボットの間に一人の少女が割って入った

「なっ！？」

ロボットはそのままマシンガンを撃ったが、

「金属化」

少女は自身の右腕を鋼鉄に変えてロボットの攻撃を防いだ

「何だと！？」

「喰らえよ」

少女はロボットに鋼鉄と成った腕を振り上げる

「イヴキャノン！」

鋼鉄の腕はロボットの装甲を貫いた

「判決」

少女が腕を引き抜くとロボットのモノアイの光が消えそのまま崩れ落ちる

「死刑!!」

アंकは唯呆然と少女を見ていた

（何だあの女は？それにあの技は一体）

「おい、そこのお前」

「!!……私の事か？」

「そうだよ、お前見た感じニードレスだよな？」

「ニードレス？…何だそれは？」

「はあ？お前ニードレスの事知らないのかよ……分かった！お前今流行りの記憶喪失って奴だろ！」

「違う……それと記憶喪失は絶対に流行らんとと思うぞ」

「えっ！違うの？……うーん、まあいいや取りあえずブレイドの所に戻った方がいいかもな、付いて来るか？」

少女はアंकにそう告げる

（今は出来るだけこの世界の情報を集めた方が良さそうだな）

「ああ、そうさせてもらおう……私はアंकだ」

「じゃあ略してアンコね」

「アンっ？……まあいいそれでお前は？」

「ぼく？ぼくはイブ、イヴ・ノイシュヴァンシュタイン……長いからイヴ・ノイシュヴァンシュタイン様で良いよ」

「変わってないし、逆に増えてるぞ…所で、イブだったか？」

「うん、何？」

「此処はどこだ？」

「此処？此処はブラックスポット」

「ブラックスポット？」

「ぼく達ニードレスが住む場所さ」

右腕と出会いとブラックスポット（後書き）

次回は本編ではなくアंकの紹介を書こうと思います。

キャラクター紹介（前書き）

今回は主人公アンの紹介です。

キャラクター紹介

アング

年齢・・・800歳？

身長・・・166cm

体重・・・49kg

スリーサイズ 90 58 88

詳細

一応この小説の主人公、冒頭で自爆（偽装）をしてNEEDLES
Sの世界に現れる

グリードの幹部の一人で鳥類系ヤミーを生み出せるが今はヤミーを
生み出すことは出来ない

現状では右腕しか戻らない

銀色の長髪と深紅の眼が特徴的見た目はロザリオとバンパイアの裏
萌香

ミッドチルダにおいて火野映司と出会い、最初は残忍で腹黒い性格
だったが映司と接している内に絶対的な信頼関係を築き性格も少し

は丸くなった、だが管理局には良く思われておらず機動六課も映司には親しく接していたがアंकには敵意を向けていた特にシンと呼ばれていた者は映司にも敵意を向けておりアंकには殺意さえ向けている

ある事がきっかけで自身のコアメダルの内タカ、クジャク、コンドルのメダルがそれぞれ一枚碎けてしまい今は自身のメダルは6枚しか持っておらず他のメダルもそれぞれ一枚ずつ管理局に実験として（洪々）提供した

所持メダル

タカ×2

クジャク×2

コンドル×2

クワガタ×2

カマキリ×2

バッタ×1

ライオン×2

トラ×1

チーター×2

サイ×1

ゴリラ×2

ゾウ×2

シャチ×1

ウナギ×2

タコ×2

コブラ×2

カメ×2

ワニ×2

神父と山田と事情説明（前書き）

今回はニードレスの世界の説明も入れます。

神父と山田と事情説明

西暦20XX年…第三次世界大戦勃発、東京を初めとする各都市は爆撃の標的となり紅蓮の業火に包まれた……それから半世紀汚染されたかつての爆心地は今もシティから隔離され日本の夜景に黒い穴を作りだしていた 通称 ブラックスポット その荒れ果てた大地に何時の間にか住み着くものが現れた彼等をシティの人々は不要者扱いしたがその中に不思議な能力を操る者達がいた火、風、重力、超自然の力を操る能力すなわちフラグメントを持つ彼等、人は畏怖の念と共にこう呼んだ……ニードレス

「所でイヴ、さっき言ってたブレイドってゆうのは？」

「ああ、僕の仲間だよ…あつ、着いたよ此処が僕の家さ」

見るとそこには教会が立っておりその入り口に緑色の髪をした少年と神父らしき男がいた

「ほお、あいつ等が…それよりイヴ、ちょっとスピード速くないか？」

「んっ？そお」

イヴはあどけていたがバイクはそのまま教会に突っ込んでいく

「だからとまれ！スピード速いって！」

「やっほー！」

「人の話を聞けえええ！！」

バイクはそのまま少年の顔面に直撃した

「……………」

「ブレイドー!!」

イヴはブレイドと呼ばれた神父の下に走っていったが

がっ!

ブレイドはイヴの顔面に蹴りを入れた

「ちょっと! 何処に目つけてんのよ!？」

「それはお前だ!」

アंकとブレイドのツツコミがシンクロする

「酷い! 誰がこんな事を?」

「だからお前だ……」

「ところでそいつは?」

「ああ、こいつ?…アंकってゆう炎のニードレスだよ」

「だから私は……まあどっちでもいいや」

そんなやり取りをしているとイヴに引かれた少年が目覚めます

「姉さん!!」

「んっ?」

「……………夢?」

「て、誰が姉さんじゃこの」

イヴは少年の首を?む

「ふんっ!」

ブレイドがイヴを蹴りイヴを止める

「やめい…」

すると教会から一人の老人が現れた

「まったく、騒がしい奴等じゃわい」

「あつ、ギドー！」

数分後 教会内

「紹介しておこう…俺はブレイド、こっちは科学者のギド昔から色々世話になっている…でっ、こっちが…」

「ぼくはイブ、イヴ・ノイシュヴァンシュタイン…長いからイヴ・ノイシュヴァンシュタイン様で良いよ」

「増えてる増えてる」

「そのやり取り私と会った時もやっただろ」

「お前さん等名前は？」

「クルス、クルス・シルトです」

「じゃあ略して山田ね」

「やあああ？」

「ちょっと、すっこんでろ」

「あいつは何時もああなのか？」

「まあ、基本はな」

「おっと、忘れていた私はアंकだ、よろしくな」

「ああ、こちらこそ」

ブレイドはクルスの方を見ると質問をして来た

「何故、テストメントなんかに追われていたんだ？」

「テストメント？」

「僕が倒したあのロボットだよ」

「ああ、あれか」

「僕は……シメオンの総帥を襲撃したメンバーの一人何です」

「シメ…ジ？」

「シメオンだ」

イヴのボケにブレイドが突っ込む

「ここ、数年でのし上がってきた製薬会社じゃな…ブラックスポーツのど真ん中にビルを建て取る、その総帥と言うと……」

「アダム・アークライト……皆さん、ニードレス狩りというのをご

存知ですか？」

「ああ、聞いた事はあるニードレスが何者かに襲われるって奴だろ？中には体の一部が切り取られた死体もあるって話だ」

「はい、さらにその巻き添えをくって無関係な人々まで殺されていくんです…全てシメオンの仕業なんです！……僕達は、その総帥アークライトを抹殺する為に400人の仲間と共に決起したんですが…僕だけ逃げ延びて……」

コッ

「!？」

するとイヴがクルスの前に立ち

「お前の仕業かあああ!!」

クルスを殴り飛ばした

「「「なあああああ!!?」」」

「クルスです……」

「だまれ山田！シメジだがシイタケだか知らないが！」

「シメオンだ」

「どっちにしても騒ぎをでかくしているのはお前ら何だよ！」

「うう……」

「大体、お前は何にも出来ずに仲間を見捨てて逃げてきたんだろうが！」

「うっ！……姉さん」

クルスは胸にあるペンダントをつかむ

「お前みたいなのを本当の役立たず、ニードレスって言うんだよ！」

「……………」

「うじうじしゃがって、姉さんだと！このシスコンやろうが！」

「……………！！」

クルスはイヴの言葉に耐え切れず教会から飛び出す

「おい！クルス君」

「……………何だよ、あいつ？」

「さて……………私の質問にも答えてもらおうか」

「ああ、それなら大丈夫、小説の上に書いてあるから」

「なんだよその手抜きは」

アंकは呆れながら椅子に座る

神父と山田と事情説明（後書き）

思うところもあると思いますが、暖かい目で見守って下さい。

シメオンとニードレス狩りと天罰（前書き）

申し訳ありませんが今回は短いです。

シメオンとニードレス狩りと天罰

しかし分からねな、何で製薬会社何かがそのニードレス狩りを？」

「ああ、シメオンは慈善事業にも力を入れ市民の人望も厚いと聞か
が…一方で黒い噂もある、人体実験を繰り返し不老不死の薬とやら
を開発し街の貴族階級に売りさばいているとか、ブラックスポット
進出に反対した連中の地区を丸ごと焼き払ったとかの…ニードレス
狩りの噂もその一つじゃ」

「うさんくせえ」

「うさんって何？」

ガスッ！

「んぐっ!？」

ブレイドは無言でイヴの顔面に足を押し付けた

「噂が本当なら奴等は手段を選ばん連中と言う事じゃ」

「はっ！…ここはブラックスポットだ問題ないだろう」

ギドは部屋にあった一つの機械を指差す

「お前が持ち帰ったテストメントのブレインじゃ、こいつは機能停止直前に自分の位置と画像を送っている」

ギドのパソコンにはブレイドとクルスの画像が写っていた

「とっ…言う事は、私とイブの事も知られてる分けか」

「恐らくそうじゃろうな、シメオンにしてみれば反逆者を逃がした上テストメントまで破壊されたんじゃ、さらなる追っ手を差し向けてくるはず…それに、テストメントより遥かに強力な追っ手が」

「テストメント以上って事は…」

「お前たちが言っていた…」

「ニードレスか？いいだろう！この俺が天罰を下してやろう」

「…………ふっ、面白い私も付き合うとするか」

（それに、力も少し戻ってきてるからな）

「それで、まず何処に行くの？」

ブレイドとアंकが教会を出ようとした時イヴがそう呟いた

「……………」

「とりあえず山田を探すか」

「…………そうだな」

アंक達は教会を出てクルスの元に向かって行った

シメオンとニードレス狩りと天罰（後書き）

今の所アंकは火炎と翼が出せます

怪人体はまだ右腕しかありません

糸とフラグメントとZEROの能力（前書き）

今回は最初の敵カフカとの戦闘です。

糸とフラグメントとZEROの能力

教会から飛び出したクルスはとあるビルの中にいた

「姉さん……………」

クルスは姉の写真が貼ってあるロケットを握り締めた

「くくくくくくくくくく……………」

「はっ！……………」

突然、近くから謎の音が聞こえクルスは怯える

シュン

「ああ！」

すると突然何かに当たりロケットが外れる

「心配する事はない、すぐに会えるさレジスタンスの小僧」

クルスの目の前に謎の男が現れる

「まっ、まさか……」

「その通り、シメオンに刃向かう者には……死を」

男はクルスのロケットを砕くとそのまま投げ捨てた

「ああ!!」

「何の能力も持たない人間がのうのうと生きていられるほどのブラックスポットは甘くない、貴様の生き残れる可能性は……ゼロだ」

突然クルスと男がいたビルが崩れる

「がはっ、ごほっ……」

クルスはビルの瓦礫の上に倒れていた

「何だ、何が起こった……」

「はっ、はっはっはっは！見えなかったのか？この全てを切断する
斬糸が」

「うわっ！！」

すると男の指から糸の様な物が出てきて男はその糸でクルスの上に
合ったコンクリートの壁を切り刻んだ

「ニ、ニードレス……」

「今頃気づいたのか、そう！これはニードレスの力！カンダダスト
リング！」

「うっ！」

男の指から出た糸がクルスを拘束する

ザシュ！！

「うわああ!」

糸がクルスの体を切り刻みクルスの体から血が流れ出す

(ねっ、姉さん)

ガッ

男はクルスに足を乗せつける

「小僧、神父はどこにいる? シメオンに刃向かう者は徹底的に排除しなくてはならない」

「どれが言うもんか」

「お前が言わねばこのエリア一帯を焼き払ってからソイツの遺体を捜すまでだ」

「そっ…そんな」

男はクルスの首をつかみ持ち上げる

「ぐっ！」

「さあ言え！」

「……………」

「ふっ、ならば死ね！」

男がクルスを殺そうとした時

「男なら、しゃきつとしなさい山田！」

「「！！」」

クルスが声のする方向を向くとそこにはブレイド、アंक、イヴ、ギドがいた

「しっ、神父様！」

「小僧、土下座して俺を一生崇めるなら助けてやろう」

「だめだ、いくら神父様が強いからって、こいつには」

「ふん！」

「うわ！」

男はクルスを投げ飛ばした

「順番が変わった！おとなしく見ていろ！」

男はそう言うのとブレイドを睨む

「さあ、お前の能力を見せてみる」

「何を！？くらえ！カンダダストリング！」

男の糸がブレイドを捕らえブレイドの体から血が流れる

「ああ……」

「ブレイド！」

「はっはっは、おっと自己紹介がまだだったな私はカンダタストリングのカフカ、この糸こそ地獄のカンダタに神が差し伸べたとゆう糸、もし切れるものがいたとしたらそれは神だけだ！」

「神父様！」

「「ふっ」」

「良かったのブレイド、滅多に御目に関れん能力じゃぞ」

クルスはブレイドが倒れた事に声を荒げたがアंकとイヴとギドは落ち着いた態度だった

「なっ、何言ってるんだ！？神父様が死んじゃうよ！…はっ」

クルスがブレイドの方を見るとブレイドはゆっくりと起き上がろうとしていた

「ふうふう…ぐううううう!!…神にしか切れない糸か、おもしろえ!!」

ブレイドはそう言うとかフカの糸を引き裂いた

「何!？」

「なら俺は神より強え!!」

「ありえん! 私の糸を切断できる者など!」

「神の裁きを受けろ」

「くっ、来るな! このガキが死ぬぞ!」

カフカは動揺しクルスを指差す

「やってみろよ」

「なっ!?!?……何だとおお!?!」

カフカはブレイドの言葉に怒りクルスを殺そうとしたが

ガンッ!

「なっ!?!?」

カフカの攻撃をクルスは左腕で防いでいた

「ぼっ、馬鹿な?」

「薄汚ねえ手で触んなよ、クモ男……ふふふ、ふはははははははははははは!?!」

クルスはそう言うと言い出した

「何だこいつ? ありえない……こいつはこれっぽちの戦闘力も無かったはずだ!」

カフカはクルスの突然の変化振りに驚愕する

「なっ、何で僕があそこに!?!」

すると何故かアंकとギドの隣にクルスが立っていた

「はっ! 貴様いつのまに!?!」

「ふっ…」

アंकは背中から赤い翼を出現させた

「なっ!?!」

「さっき私がコイツを空から連れてったのが分からなかったのか?」

「貴様! 飛行能力を持つニードレスか!?! ……じゃあ、じゃあコイツは?」

カフカは自分の隣にいるクルスに目を向けた

「残念だったな、ブレイドに目が行ってる内に入れ交わせてもらったよ」

するとクルスの体が序所に変化していった

「まさか、ドッペルゲンガー？」

するとクルスはイヴに変わった

「!!」

「イヴの能力はドッペルゲンガー、質量を大幅に変える物で無ければどんな物にも姿を変える事が出来るんじゃない」

「金属化くらいよ、イヴキャノン!!」

イヴはカフカに鉄の拳のアップーをかましその衝撃でカフカは吹き飛びビルにぶつかる

「すっ、すごい」

「後は任せたよ」

「おう」

「くっ、くそ貴様ら全員切り殺してくれる！」

カフカは立ち上がるとブレイドに攻撃を仕掛ける

「カンダタストリング！」

「うおおおお！！」

カフカが放った斬糸はブレイドの近くに來た所で全て切れてしまった

「なっ、なぜだ？絶対に切れないはずの私の糸を…またしても！」

「糸を切る時はな同じ糸を何本か絡めて引っ張ればいいんだよ」

（くう、私の糸同士を絡ませて切断したとも言うつもりか？）

「いいだろう……ならば！これだけの糸を見切ってみるがいい！くらえ！テンペストスレッド！」

カフカの背中から無数の糸が飛び出しブレイドを襲った

ゴオオオン

ブレイドはカフカのテンペストスレッドをくらい吹き飛んでしまう

「ははははは！どうだ！それだけの斬糸をくらい生きていられるか！」

カフカは自分の勝利を確信したが砂煙が消えるとブレイドはその場に立っていた

「覚えた」

「なっ？」

「何だって！？」

「こうか!？」

ブレイドは飛び上がり背中からカフカと同じ糸を繰り出した

「まさか、貴様の能力は！」

「その通りだ！」

「敵の能力を覚える能力、すなわち…ゼロのフラグメント！」

「テンペストスレッド ゼロ！」

「ぐわああああ!！」

ブレイドのテンペストスレッドがカフカを切り刻む

（そうか…こいつは私の糸を操作したのではない私の技に同じ技をぶつけ相殺していたのだ!……ドッペルゲンガー、飛行、ゼロ……こいつら一体?）

「判決!!! 死刑!」

夕方

「はー！神父様、いや、神父様、神様ですよ」

クルスがブレイドに頭を下げていると

「んっ？」

イヴは瓦礫に埋もれていたロケットを取り出した

「シメオンの連中に殺されたそうじゃ、今はまだ姉を失った悲しみから抜け出せずにいるのかもしれないの」

「……………」

イヴは無言でロケットを握り締める

「はああ、神父様」

「おい」

クルスがブレイドに頭を下げていると突然誰かに声をかけられた

「んっ?……」

クルスが声をした方向を見ると

「男なら、しゃきっとしなさい」

そこにはクルスの姉であるアルカに変身したイヴが立っていた

「姉さん?……」

「僕にしてやれるのはこれくらいだ」

イヴはそう言うのとクルスにロケットを渡した

「ああ……くっ、うう」

クルスが涙を流すとイヴは優しくクルスを抱きしめる

「姉さん、姉さん」

「イヴ」

「優しい所もあるんだな、アイツ」

ブレイド達がそう呟いていると

「山田」

「『！』」

イヴはクルスの事をクルスではなく山田と呼んでしまった

「はははは……うわあああああ！！！」

クルスは泣きながら夕日の方に走っていった

「おい！待て！」

「「この役立たず」」

「何よ！一生懸命やったのに！」

「うるせえ！おい戻って来い、山田！」

「クルスです！」

「やれやれ……そういえば、アंकお前のフラグメントは火の筈、なぜそんな翼を出せる？」

「ああ、まあ隠す事じゃないし行っておくか、私はニードレスじゃねえんだよ」

「「はあ？」」

アंकの言葉に不思議がるブレイドとギド

「いや、てゆうか私、人でも無いんだ」

「何!？」

アンの発言に驚くギド

「じゃあてめえは何なんだ？」

「私は……」

アンは自分の右腕を怪人体に変える

「「!?!?!」」

「グリードだ」

糸とフラグメントとZEROの能力（後書き）

次回はアंकが自分の事をブレイド達に話します。

アंकとグリードとコアメダル（前書き）

更新が遅れて申し訳ありませんでした、後今回はかなり短いです、すいません

アंकとグリードとコアメダル

教会内

「それで、アंकお主が言っていたグリードと言うのは？」

「ああ、私の世界で800年前にある王が作ったコアメダル、それを基にして作られたのがグリードだ」

「じゃあ、アंकさんが人間じゃないって言ったのは……」

「ああ、私がメダルから作られたグリードだからだ」

「しかし、アンコが別の世界から来たってのは驚いたな」

「だからアंकだ……それで、他に聞きたい事は」

「あの、コアメダルってのは？」

「ああ、これだ」

そう言うときアークはタカの絵が彫られた赤いメダルとトラの絵が彫られた黄色いメダル、バッタの絵が彫られた緑のメダルを取り出した

「これが、コアメダル」

「色が違うんだな、それに動物も別々だ」

「そうだ、グリードは私を含めて5人いた」

「ごっ！、5人！？」

「ああ、まず昆虫系グリードのウヴァ、猫系グリードのカザリ、重量系グリードのガメル、水棲系グリードのメズール、そして鳥系グリードがこの私、アークだ」

「そうなんですか……あれ？5人いたって？」

「それじゃあ残りの4人は」

「ああ、とっくに死んでるよ」

「そうですか……すみません」

「何、気にするな元々あいつ等とは敵対関係だったからな」

「えっ？それってどうゆう」

「もうこの話は終わりだ、疲れた」

そう言うときアークは部屋から出ようとする

「おい、待てまだ話は……」

「いつか又話すよ」

アークはそうブレイド達に言うとき部屋を出る

パシリと刺客とデロドロンドリンク（前書き）

今回は右天編です。

人類滅亡とか言っていましたけど結局何もありませんでしたね。

パシリと刺客とデロドロンドリンク

「ああ、あああ」

教会内でクルスはある男に追い詰められていた

「かあああああ」

「あああ」

クルスは腰を抜かしその場に座り込んだ

「もう逃げられんぞ……………」

男はそう言う

「タバコ買って来い山田ああ!!」

「ひひひひ!!」(山田が定着してる)

男（ブレイド）はテンペストスレッドを出しながらクルスにタバコを買ってくる様、命令しながらクルスを追いかける

「うわあああああ！！！」

「タバコ買って来い山田ああ！！！」

「クルスです！」

「タバコ買って来い山田ああ！！！」

「クルスですってばああ！！！」

アंक、イヴ、ギドはブレイドとクルスの追いかけてをキッチンで眺めていた

「あのガキ、何時まで置いてくつもり？」

「しかたなかろう、死んだ姉以外身寄りもおらんかったようだし」

「最悪、私があのかきの面倒見てやるよ」

ガチャ

そんな話をしているとドアが開きクルスが入り込んでくる

「たっ、助けて下さいイヴさん！」

「てゆーか、お前がこの小説のレギュラーだったって事にもうびっくりだよ」

「そんな酷いいい」

「あきらめろクル…山田」

「何で言い直したんですか！アंकさん！？そのまま言えばよかったじゃないですか！」

「とゆーわけで…ほい」

「？」

イヴはクルスに小銭を渡した

「なっ、何ですかこれ？」

「スーパーゲル状デロドロンドリンクも買って来いごらあああ！
！」

そう言うといヴもクルスを追いかけ始めた

「うわあああああ！！」

「山田、ついでにアイスも頼む」

（そう言うわけで姉さん、僕はこの教会でパシリをさせられています）

クルスはそのまま走り出していった

（一応、感謝しているんですがイヴさんの飲み物の好みは変だし、アंकさんはグリードってゆう怪人だし、神父様にいたっては普段何しているのか良く分かりません、後、山田呼ばわりだけは何とか

して欲しいです。」

「山田これは何だ!？」

クルスが教会に帰るとイヴが買って来た飲み物を見て怒り始めた

「僕が欲しいのはスーパージェル状デロドロンドリンク!これはドロンドリンクじゃないか!」

「え、違うんですか？」

「全然違うだろうが!」

「おい、イヴ:いいじゃないか、デロドロンもドロドロンも結局同じ分けが分からないゲテ物飲料だろ」

アंकがアイスを食べながらそう言う

「全然違うは、ぼけええええ!!!!」

イヴがとんでもない形相で叫んだ

「すっ、すいませんそれしかなくて」

「見つかるまで探すんだよおお!!」

「ぶうううう!!」

イヴはクルスの頬に蹴りを入れる

「アンコ、お前も手伝え!!」

「私はパス、お前ら2人だけで行け、それと私はアンクだ何度も言わせるな」

「ふん!後で欲しいって言ってもあげないからな!」

「誰が欲しがるか馬鹿」

「行くぞ!山田」

「はっ、はい」

イヴとクルスはそう言うのと又買い物に出かけていった

その後、イヴとクルスは市場でデロドロンドリンクを探したが売り切れだったり、クルスが最初に買って来たドロドロンドリンクだけだったり何処にも売っていなかった

「イヴさん、やっぱり売ってないんじゃない？」

「うるさい！ かならずどっかに売って…！！」

「どうしたんですか？ イヴさん」

「あっちだ！ 行くぞ山田！」

「えっ？ ええええええ！？」

イヴはクルスの首根っこを掴むと走り出した

〳数分後〳

「毎度……」

「ほら、合っただろ」

「たっぷり半日は歩きましたけど……じゃ、帰りましょうか」

クルスがもと来た道に戻ろうとしたとき

グッ

「うわっ！」

イヴはクルスの首根っこを捕まえて自分のところに引き寄せた

「ちっ、めんどくさい奴がいるな……」

「えっ?……ああ!」

山田は路地裏からイヴと同じ方向を見るとそこにテストメントが徘徊

徊していた

「テストメント……たっ、戦うんですか？」

「あんなのと一々戦ってられるか…とりあえず」

イヴはそう言っていると隣のビルを見つめる

〽数分後〽

「「はあはあはあはあ」」

2人は隣のビルの中に逃げ込んでいた

「ここに隠れてやり過ごすとするか」

「弱りましたね、早くあいつが何処に言ってくれないと、帰れませんよ」

「へえ」

「「!!」」

すると辺りから謎の声が聞こえた

「帰るって何処に？」

2人は後ろを振り返り辺りを見回したがそこには誰もいなかった

「だっ、誰が？」

「テストメントを破壊した神父のところ？」

「「!!」」

「それとも他に仲間がいるのかな？」

2人が上を見上げるとそこには赤いマントを羽織った少年が宙に浮いていた

「イツ・ア・マジ〜〜ク」

「くっ、空中に浮いてる!」

「お前、まさか……シメジの追ってのニードレスか?」

「シメオンです」

「ピンポーン、大正解……僕はシメオン四天王の一人、右天」

「!…しっ、シメオン四天王だって?」

右天と名乗った少年の言葉にクルスは脅え始めた

「どうした、山田?」

「シメオン四天王は……たった……四人で……たった四人で僕の仲間を一瞬で壊滅させたんです」

「くう!」

「ダメだ、もうお終いだ！」

「ガキの方には聞きたい事があるんだよねえ、お姉さんはここで消えてもらうよ」

バツ

「イリユージョン」

「!!」

ガガガガガガ

パシリと刺客とデロドロンドリンク（後書き）

今回は三話ぐらいかかるかもしれません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5702w/>

REVENGE of GREED～復讐のグリード～ AVENGER ANKH

2011年11月16日20時21分発行